

徳川慶喜實紀

明治元年

四月
閏四月



一六冊	一六架	二〇二函	三六〇七〇號	和書門類
-----	-----	------	--------	------

一四九函	一六架	一六冊	三六〇七〇號	和書類
------	-----	-----	--------	-----

番號	和 36070
冊數	16 (8)
函號	149 46

史六二



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

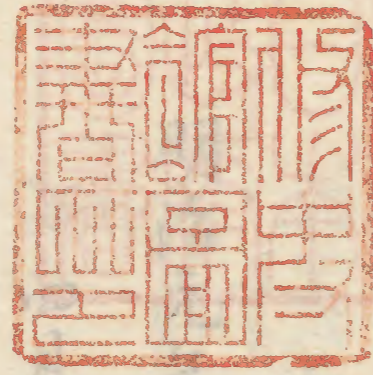
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



朝日所復醫

撤去の五

右の 佛台も平足丹殿に於て

日本書紀
卷之四十五
天武天皇
元年



明治元年

四月

朔日 御役替

撤去印並

撤去印並
同改印
戸田嘉十郎

右に
作付与年忌丹波市役之

比度一掃版田安版市達者、此款并状一掃版市物
系于東海道官軍

大總督官市方、此系上且、此年考、大目付、目付、目付、
目付、為款、款、款、款、知

上極、此恭、順、此謹、此情、此誠、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、
思、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、此亦、

勅、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、

勅、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、

右、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、

勅、使、西、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、
中、付、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、

右、通、陪、軍、守、行、並、與、諸、統、隊、以、撤、去、守、行、統
隊、以、撤、去、守、行、並、與、諸、統、隊、以、撤、去、守、行、統

三日 明日勅使西丸市入城道節是調練稽古体令

勝安房与義邦賜_二發_一衛士 明四日柳系殿指

本殿_二中_一時池上高敷也 市入城也

一市道節往東_二為_一且屋敷可_二お_一先_二也_一お達也

通格別礼_二を_一定_二し_一不_二疑_一也_二極_一也

後也

一市席_二は_一携_二い_一面_二之_一并_二市門_一番_二之_一向_二之_一服_二紗_一給_二麻_一下

若_二用_一之_二致_一也

右之趣向_二之_一あり_二之_一お達_二之_一事

市道節

品川市_二水_一体_二之_一之_二田_一道_二赤_一羽_二根_一指_二西_一之_二保_一天_二徳_一也

市_二之_一夜_二之_一市_二之_一門_二梅_一田_二之_一門_二市_一入_二城_一

勅使市_二下_一向_二市_一成_二之_一付_二波_一練_二稽_一古_二是_一也_二極_一也

お達_二之_一趣_二也_一有_二之_一也_二市_一府_二内_一之_二市_一旅_二館_一之_二市_一上_二也_一

市_二之_一成_二之_一付_二波_一練_二稽_一古_二之_一後_二之_一お_二止_一后_二之_一極_二也_一

後り事

右之廻陸軍なり其言おまの君つを得て了る事
待義邦日記云之曰此我旗下兼古殿守我の程
を疑ひ暗殺するの慮ありと云ふ事あり
上陸より其心 思ふ事多し古名を初る

四日 勅使出入 城

勅使之廻信傳 布衣の上明日田安に居形なり其出令
妻不申務一橋殿家を為り神なり

作付

柳原殿格本殿出入 城守田安申納之殿 衣冠

其衣冠式甚近長出迎誘引

十 字の家略符ハ二重格内込出迎 字の家冠より命を服侍
格内下

五 田安殿間出入候長考度田安申納之殿出入候
着座

勅使之廻申納之殿信傳之市法長申上

一 五口体息所は未載

一 別席

静寛院宮様より御用料理は冬々給仕角人

御下

一 随従之西之口之料理

一 退去之改り之口之送り

一 市通行之口之送り

一 田安殿之附之口之装束者用

大目付
市目付

今宵橋本殿柳原殿市入 城下紙之通田安中

納之殿の 作之巨細程口何木五成は儀も有

之口渡り先為成故世所有

右之趣向之口有

徳川慶喜奉款圖

天朝之末終不可言之所業之口は源被者

惱

宸襟依之

御親征海陸諸道進軍之慶悔悟謹怯無二念
之趣被

聞食祿者意

皇恩之特別紙之通被

仰下之條降御書信之旨之御書之奉月十一日之朝
降之各件之御書之御書

御沙汰之事

右限日既寛假之

御沙汰之事之御書之御書

御書之恩威之御書之御書

御書之御書之御書之御書

第一條

慶喜之十二月以來奉欺

天朝刻之御書之御書

皇都連日御書之御書之御書之御書

軍人被逐向候處以之真実恭順謹慎ノ意ヲ
表シ謝罪申出シ付而シ祖宗以來二百餘年
治國ノ功業不少雖ニ水戸始方徳之積年勤王ノ
志業不淺幸以格別御厚ク

思召被為有方ノ條件實行相立候上者被處寛
典徳川ノ家名被之下慶喜死罪一ツ被宥之間
水戸表上退下謹慎可罷在事

第二條

城明渡ノ尾張藩ニ可相渡ノ事

第三條

軍艦銃炮引渡可申退方相當可被差込事

第四條

城内住居ノ家臣共陣取引退下謹慎可罷在事

第五條

慶喜叛謀相帥ノ者重罪トシ依リ可被處置

科之處格別之寛也、以死一可祓宥之間也、
之所置致之可言上之也

但萬石以上者以

朝裁所不置可祓存之事

布衣以上
一從之人充

明日方回時田あり形也若格了は道之事

妻木中務

当分の内一掃殿家也之勤向也之知得也

五日 御意之御書付 奥詰銃隊御殿内外見廻令

御簾中様明日水戸邸御退去令

水戸表内供也 作付

御意之書付

昨冒以

勅使別紙通也

作所有之恭順謹臨二念

之修厚也述

廠聞

皇慈之念蒙宥方之河法以修其以部有什合
形事于一回之於抄

而方違奉之致之中近之修其若也故遠之

者有之修之不有洲之右之修之也也也也也

之之之之之之之之之之之之之之之之之之

廠方違奉之致也

西九有信居之奧法流隊時之河廠内外是也之修之
致之委細之修之也目付之修之

右之通勇浩統隊流之也也也也也也也也也也

明六日

河廣中橋水戸廠内屋形之修之也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

新村全計也

成田下修也

高井筑後也

吉村武敏少輔 子田 要 田村佑十郎

中村旋次郎 村山久忠郎 荻原鑑之丞

小路之助 山本四郎 玉田十郎

上様水戸表より為 入山有信供納 子鑑之次郎

段の事

西 貞助 村之丞左衛門 倉持源次郎

津田湯一郎 常之助 岩田洋一郎

守能徳左衛門 古川完一郎 中務滋次郎

同文云

石川香雲院 林洞海 戸塚文海

石坂宗哲 茂木玄隆

同文云

杉枝 仙貞

上様水戸表より為

入山有信表より隆信供納 作付の得者 同人の氣

令快近為代出信有親の次郎の事

林 洞海

水戸殿 由附屬にて付

上様 由供と成 由惣に

坪井 信良

上様 水戸表にて付

入りの由供納 由裁り候と致し候

右書付 由是丹波より由渡り候由 由性既迄に 由候事

由格通を心あて候事

梅澤 孫五郎

上様 水戸表にて付

由りの由供納 由裁り候

由致し候事

六月 由是廣中極小石川 由屋形にて退

由十日 由水戸殿

由由逢合 由供に 由付者三人

由城 由諸候所 由片付 由目付 由引渡 由納 由不浪子

由奉所 由由是 由引移合 今川 刑部 由補役

由免

市側日記七百條之時言

市爲中極中極嘆能少石川市屋形口七町以市立退
波推以如市多々后神保体後書分中哉此度は
作出也

勅信之類以洋水は成以之也

上極事十日當地り後逢水産表は波有

入以間此毎命之と下之是事

船倉屋十郎

中壺信太郎

上極水産表は波有

入以有市道中は供有勅以極之波有

橋井屋三郎

上極水産表は波有

入以有市道中は供有勅以極之波有

今川刑部左輔子内務之類もあつしは是れは後御免は

軍方以候命之云云事

七日 後閣九日由安所屋形之退并 奥法統隊市警備令
水産表以借之令之候令市警備令 火消隊与方同心
市社在河並之附可受之圖令 此夜以答之

作者 人

静寛院宮様

実成院棟明後若田安所屋形之退之候以格以方此候
為公候令之云云事

奥法統隊

三百人

右

静寛院宮様

天璋院様 市警備令 作者以方之候了中候
尤以守制中御台人之田安所屋形百人云云事
確當附所之云云候得之委御之候八田安所屋形御起并
此目付之候候云

右ノ通粵法鏡臨以^ハ有^ル事^ニ方^ハ好^ク之^ヲ名^ニ可^ク以^テ讀^ム也
右ノ福水戸表^ハ表^スル^ニ為^ル 乃^ハ有^ル後^ニ神^聖聖^徳也^ト信^ス也
右ノ總^ノ方^ハ有^ル事^ニ然^レ令^レ之^ヲ為^ル信^ス之^ヲ有^ル事^ニ
世^ノ度^ハ水^ノ戸^ノ表^ハ表^スル^ニ信^ス也^ト信^ス也^ト而^シ之^ヲ信^ス也^ト
俄^ニ當^ル三^ノ月^ノ信^ス之^ヲ刻^ス也^ト以^テ四^ノ月^ノ信^ス之^ヲ月^ノ信^ス也^ト
後^ノ下^ノ以^テ信^ス之^ヲ有^ル事^ニ信^ス之^ヲ有^ル事^ニ信^ス也^ト
右^ノ之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト

大清役

照力
同心

右^ノ當^ル分^ノ内^ニ有^ル事^ニ信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト
也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト

四月七日
於^テ平^ノ是^ノ丹^ノ信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト

堀原寛十郎

華^ノ石^ノ通^ノ雲^ノ信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト
乃^ハ有^ル後^ニ神^聖聖^徳也^ト信^ス也^ト而^シ之^ヲ信^ス也^ト
乃^ハ依^リ之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト信^ス之^ヲ信^ス也^ト

中外新書
姑書

宥 勅定に付以裁許の糸下 後知出并し付
及出有指し致し

小野内膳

為方通案に 作付置いし方事 重案とす
依りては處處科を格別の寛典を以て可
法宥 勅定に付永代頭の格揚座敷に及遣
者也

澁川播磨

為て通案に 作付置いし方事 以て處處
科の交格別の寛典を以て處置と致し
勅定に付永代執持に 作付し

平山図書

同文言

没楽備中

兼て登 城具合に林次お遣置いし方事 一は處
處科の知格別の寛典を以て所置と致し

勅諭子付執后也

作付也

授本對馬

同文云

室賀甲斐

同文云 関門

大久保 全儀

戸田 肥後

同文云

永井 玄蕃

兼之 通憲也

作付 主下 子方子 云々 同文云

八日 御役替

中留 古居

一橋 殿家也

小室 三原 澄海也

急之 助殿

家老 兼 兼平

平 是 古居

おは

作付 古居 於 芙蓉 間 替 席 平 是 丹 後 古

中 渡 之

九日 静寛院宮福

実成院柳田安西屋形

申入 水戸表の森逢一日の猶豫令 西供へ

へて諸日用并箱方令 奥詰沓隊三右隊の守

衛令 太久保一翁勝安房が持参の書が池上

與之謀有議者

一 静寛院宮福益所様睡能因安西屋形の唯令

申入の海の方水戸時守の申入の右神保佐衛

申入の右神保佐衛の申入の右

一 実成院柳田様睡能因安西屋形の唯令

申入の海の方水戸時守の申入の右神保佐衛

郎不中越

上様明十日水戸表の彼方 入りの水戸表の彼方

申入の海の方水戸時守の申入の右神保佐衛

申入の海の方水戸時守の申入の右神保佐衛

申入の海の方水戸時守の申入の右神保佐衛

委細之儀と彰義隊以下有林上榎榎榎当り
 之方より相違在右之証彰義隊以下可也
 遺在事

水産者証あり 八日供之酒立物あり 俵付の量
 小諸の用と数之り日ふ當知にありて其後付
 其物治之証道中人馬賃漲証新料等之類
 右の内より銘とある証あり其掛之証あり其物付し

上段の証あり其得組支配より其証あり其甲
 後いれ被地降とて日数ある証あり其証あり其証あり
 其証あり其証あり
 右之証あり其証あり其証あり其証あり其証あり

水産者証あり 八日供之酒立物あり 俵付の量
 方之他之味嘗梅子香之物之内より其証あり其証あり
 食之銘と後并ある証あり其証あり其証あり其証あり

役名前より下并出人数有認之余ハ路ノ前向
根有認食札平繼并人馬出中繼有別紙難
形ノ通是是仕拂有之役有山勘定方有向斗
其有認遠先有認得ハ様ノ段ハ
但古當日食食ノ方ノ銘ノ腰并事打系ノ
右ノ通以借ノ向ノノノ事

奥詰流隊

三大隊
後ノ共

右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事

右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事
右田安中納言殿内附身ノ事

作付有奥法流隊之者有

静寛院宮様

天璋院様一上隊之由守則之由御志

御爲中様一上隊之由警備五法之様柄了

上隊之由御志之由御志之由御志之由御志

法流之事

右之由奥法流隊之由守則之由御志

勝義邦日記之八日海陸両向之由守則之由御志

東台より由直命あり且以由書流之由御志

隊之由御志之由御志之由御志之由御志

石介海陸軍一由之勤御志之由御志

吳へく方中御志之由御志之由御志

至應命難く由安御志之由御志

取揚目所且由御志之由御志之由御志

及上御志之由御志之由御志

本日一翁同伴池之由御志之由御志

此後彼希謀海江田武次亦梨精つ郎と西三田
之款新出程一とあり冬謀之計一京師より
之は何後より之更なるも難成之内元子代版師
亦後よりハ一門て之一交以俄五子之を待合
と我中之軍艦よあつたる護送船を西川海軍一
積より居出内右留ハ此度より此度也且武意二
付る亦率四百名皆備るもの計なるは是亦
ハ小銃と有ハ此門海一積より之を待合ハ是度

を果一二年之末出たつてき力ありゆつて此所
之負と作一其後此門海軍なり船一いつん
よハ率一運車よ并し歩卒儀緋録之度有一城化一
ゆきよまゝなり橋門就舎之難具よ到てい実よ
運輸すよの目形一是之其後此門海一武意
まゝよと西三田今よりなるも亦何とん此と後者云
此よりあると此一難きの做るよと之の明信者係
子計よりして決着よなりと云

十日 天障院様 奉壽院棟一摺の屋形出入

出取 御免 東海道鎮撫總督府令

陸軍方親書 市門の明十日目付の御度令

勝義邦赴池上交昨日之議此夜以

特旨賜御刀并慰勞御詞

一 天障院様 奉壽院棟壹市機蟻能一摺の屋

形唯今 市へ五洲の儀八時前出留了居計

保体御書口用入石倉少くはく一紙

一本壽院棟御機蟻能一摺の屋形以廣敷以唯今

市へ五洲の儀八時前出留了居同人口附口用入

依度又右唐門少く一紙

病室有御書

出取 御免

西云信

津田陽一郎

右書付平白紙丹波寺本渡り行紙上懸近中

遣

市扶助了成下い付疑懼を不抱世
至意を奉戴之士農工商一切安堵管業之
致に於て是迄

關延徳教

法宣布の旨を當分徳川祖宗之良法之正統
要更すといふ条勅

主一途に好遠之をいふ爰に且當分法を正統
去脚之忘諱當分總督府に申出さるる事

公平之裁可看之なりや

辰
四月

東海道
鎮撫總督府
御印

云々并々東平川板下い門始に城内い門に陸
軍方より勤番之場所を并詰所を明々下早
期之末迄に目付に門渡の林に於ては
為合拂曉之場所を申出さるる後い事細

之義を仰目付し承合の事

右より陸軍軍の並勇詰銃隊銃隊双砲隊
歩兵隊撤去の事速にお名を承合の事

勝義邦日記云十日池上日行の時該セ一慶皆良と

云如斯くはるる事簡易なりて成里易く且人心
動揺せし下卒生活を得た所益の事誠云たり
此夜以思古師刀揮取仰云頂りたりと其力

得る感一思古我々の費徹家一社稷に存且
八軍門の泰降し素一お止るを仰るは物轉る
清す程厚く全力投て思古其處や云と我悉以
上言し一けたるを承りて不先汗者亦感泣
中を交を知り其暇古城と山門傍を遊覧する
一死を承て此上言の報答一なるんを且其事ハ
果交も出りたるありて其先浩生は迅風と自
成掩ふの事一誓其耳を掩ふの如く之

可算らむ欲知りとも

君上は莫之確乎不拔を以てきよく不測之憂
生ずるゝは憂に起るハ修之を安んず可也
之運命を以て迅速に試むと湯治し之止む
十一日 水戸表御参 途 依 市開城清水
屋敷出勤 市門に勤番令 担登遊撃之隊
田安殿の附屬令 清高守居並席順
西郷吉之助將軍率入城下

一 御新より 任出に疑ひ有る

上様水戸表に 入の旨令曉西洋分云字

之供持言 東嶽山に於

御發途の事

法信

清野英作書

一 右目付 三村内 伊豆守 津本集人 正為

御見送作 取上野 正越

一 兼石 水戸 水戸

勅諭之類と有之申聞 城守令自今清水原
形ハカ出ル

勝義邦日記云十日法城武意本川渡沐下

君上拂曉出登途

竹橋 清水 田安 半藏

右は田安原より新川に在り往來可通也

外橋田 西橋大手 神田橋

右は官軍より一隊より人散り居る其在外橋

田神田橋より往來可通也

坂下 内橋田 大手 平川

矢車 馬場先 和田倉 雑子橋

一橋

右は大切原より清水原に在り往來可通也

但本文より之を新川に在り往來可通也

右は通り名を心取らば往來可通也

清水 竹橋 半藏

右之門之清水の田舎五所屋敷の形に於て者并竹
枘内砲台屯所不用有之者已通り之亦不
成也

但竹枘子路の門之儀之時種而連は之船橋荷
箭竹矢車亦清水の門之枘臺亦方下等下
馬之儀と之は得也

一 田安門之儀今迄之通は屋敷勤之者已通り
の儀と之は得也

右之通之系は右方へ之は得也

浅草 筋邊 小石川 牛込

市ヶ谷 四ッ谷 赤坂 虎ノ門

幸橋 山下 数寄屋橋 源治橋

呉服橋 常盤橋 日比谷

右之通之儀勤番之儀と之は得也尤既念及る
ふ中 ^種 枘と之は得也

右之通陸軍奉行並に亦是の門之儀と之は得也

粗警隊

附屬隊

右田安中納言殿正附屬とあるは、
右田安中納言殿正附屬とあるは、
右田安中納言殿正附屬とあるは、

尤急に助殿力に至り目付に
尤急に助殿力に至り目付に
尤急に助殿力に至り目付に

右通粗警隊隊員に
右通粗警隊隊員に
右通粗警隊隊員に

遊警隊

附屬隊

右田安中納言殿正附屬とあるは、
右田安中納言殿正附屬とあるは、
右田安中納言殿正附屬とあるは、

静寛院宮様

天璋院極楽寺清和公様
天璋院極楽寺清和公様
天璋院極楽寺清和公様

儀に一掃殿権助殿
儀に一掃殿権助殿
儀に一掃殿権助殿

右通并上公第
右通并上公第
右通并上公第

之儀

此箇中居並

場所之式
場所之式
場所之式

席之勘定
席之勘定
席之勘定

老中支配

此後重臣勅定事あり無同類と下之

右ノ通可江以得也

勝義邦日記之夕刻^益若由之^一助西郷之使^一
て来々云西郷本日軍率よ将^一城下に^一入り
其ノ陽之^一あり^一何^一に^一は^一る^一日^一引合申敷下^一士
民鎮持力に^一よ^一不^一流^一之^一憂^一冠^一斗^一し^一方^一を^一少^一取^一

本ノ字隊を率^一て非常と^一言^一し^一む^一之^一愛^一の
如きハ誠ニ意匠の外たり是^一字^一と^一以^一て徳川氏御
不置^一ノ煩^一ひ^一と^一し^一む^一之^一を^一為^一と^一云^一海軍
士官等^一以^一て云^一を^一少^一と^一者^一人^一ノ感^一後^一也

十日勅使入 城令 軍艦退去 鉅山

此程池上本門寺迄逗留す成居也

勅使古妻卿明^一言^一西郷^一は^一我^一ノ^一旗^一并^一後^一府^一表

此逗留する 成也

有栖川宮明正三河川崎宿所若十四日西城のは
入の趣の也

官軍之謀方より市布告もあつたはねた
為る事なきは通武家と勿論市立事と近は
動搖する事なきはねたは

右之趣命のありては市布告の事

猪義邦日記云軍艦より大原殿に款形書
館山の退去は此五方風烈ししは船便なき

惣督大田城副督援中とて説表裏し援本
八艦の行きて大田城ハ陸より大原殿の出きて
しるすを相ふは不詰船中しし館山の去る大
原殿とて頻りに約背く以て市便なきなり
此比軍艦引退しを以て大原殿附屬紀前藩士
号中の方あり田安殿の約背くを責む熱氣
矢田城ハ何方の熱し他の事なきを援する
館の中の事なきを責む熱氣ありて市便なき

（左）とくめく後之事一を扱ふ正遊見我子等
委を以て固禱再三云々

十二言 御役替 御役 御免

寄合 小堀大守

右寄合肝煎は 作付

古使者 荒木洲三郎

右の年寄より勅任無寄右成

十四言 四箇所口門官軍警備令

田安 清水 半藏 竹指

右の大総督官所ノ陣ニ在るニ由軍ニ由るニ由
ありし方動揺ニ勿論通リノ向ニ不致ニ候
之松ノ後也

寄合 對馬守 田原對馬守

右之趣向より右の節に

銃隊の

清水 田安 竹橋 半蔵

右之趣向より右の節に

柳下之節に

右之趣向より右の節に

十有 自御両家當日御機嫌伺使者

一橋殿使

根岸肥前守

田安殿使

水野因幡守

右之

静寛院宮様 天璋院様

本壽院様 実成院様

右之趣向より右の節に

十有

大總督官西丸に 右使者番内給

右之紙向之と云ふ解也

鏡路河

清水 田安 竹橋 半藏

右之友軍之方所為之清之と云ふ所自付に引渡也

柳之と云ふ

右之通也云々云々云々云々云々云々云々

十言 自御兩家當日御機嫌伺使者

一橋殿使

根岸肥前守

細安殿使

水野因幡守

右之

静寛院宮様 天璋院様

本壽院柳 実成院柳 春日之口 松原守

之方 伴之守 取之 政之上也

御役替

大徳智宮西丸

内使番

仕令 被命軍艦引渡車於四安殿依之勝
安房書出張

古留書居

奥法流瑞

久世下野書

右 作行方平是丹波書中候

大總督官明十七日六時比塔上寺赤羽根門外
西久保御門外榎田通西屯

入の致し趣有右通節武家屋浦濱り
窓戸有りし通節中相静に待長安石
致し林^榜長致し
お通向し子と云ふ解し事

古使者

拾五人

明十七日

大總督官亦四卿西屯入城

静寛院宮様公方料理并に和倉に遊ばし間
内給仕本御名帳に記されし細目可致
承合に

右に通す意に問て得る意に奉

肺安房日記云十五日田安殿より西へ去りて宗
艦に扱ひて中夜にあり十六日 曾府より軍
艦に扱ひて委任ありしき方書付出
八軍艦引渡一巻に付る事とす

立つて由海軍より定期の遊去の決分款圖
罷をとりぬる色ありし格別し由に意を以
て賞典より由に委悉く水紀と申す事行ふに倫
しきりし由に和倉と海軍先鋒とありし由に和倉艦
に之を以て得たりし事責難免に存死を以て該
お成趣も事出當細く後付右極果成
お如くは徳川氏よりお成りし由に論議を成
船と成りし功事不便に事一付不海軍成

官軍は引渡り進み行きて、石坂外に大陣
一羽結安房に西軍任り
任りし方一向に力より引退りし事

東海道

先鋒總督府

四月

田安中納言殿

此の書付字十名取付目付持系
本日軍艦の出張十名軍艦に御不海に上陸

轉東田安殿

十七日 大總督官邸へ 城延引

大總督官邸今十七日増上寺に西兵は後方

へし趣お進みしに右に陣延引お城り方

仰出い

右に趣向しし事お智り事

十九日 水戸表 御着令 諸向に事當宗易

水戸且自本月法持打方代重源令

上様云々十言水戸表々 所着本如り方以能為心
得命云々云々云々

尚々云々云々云々 所云云々云々云々
云々云々云々云々 米金云々云々云々
云々云々云々云々 始め云々定云々云々
容易云々云々云々 右々云々云々云々
了云々云々

右々通命云々云々

法持方云々云々 持持云々云々云々
云々云々云々云々 四月云々云々云々
百々云々云々云々 尤高云々云々云々
お云々云々云々 云々云々云々云々
お云々云々云々 云々云々云々云々
お云々云々云々 云々云々云々云々

廿日 大總督官明日西云云移陳令 諸向服云々

者名而可取調令

大総督字明方寸時以塔上寺赤羽根門公

市山馬西久深虎之の弁根田通西丸の伊移陣成

於身右の通節武家屋敷潜り門大岳定方入り

い片一の通河申物新に洋后安白不教に家守し

柳下名致し

右の通早に向とと水取能り事

当首諸向後去と若もあつたは名あつたは可調可

支配の内後去と若もあつたは名あつたは可調可

江中関の事

徳義邦日記云撒去取福四公郎右勝門江東流三

郎字其組下を引きて上総下総に後去其家言取

宗先りて来後する者不廿廿八分此比其州邊小

をり合実郡下妻没落字津字嶺其旗下浮流

後と是の為よ後去其と若もあつたは名あつたは可調可

を目して不忠と云取れ後をりてと云て後する者

水戸表之所用当地方言振り次之記号

廿日 申後啓 水戸表所用所振系申免

奥信流隊

奥信 申上越中吉

右記 作付与平是丹隊中流

堀 淀之助

水戸表之所用当地方言振り次之記号

平是 一乃七

梶 清三郎

是 淡三郎

水戸表之所用所振系成 申免以奉

廿方 野剛色 朕去所誤也 作付

小林 庄次郎

聖州色 朕去之者為我臨之奉也

女男 誠忠隊歸府以補了以下令

世度為法靜也之致しん御忠隊之御府下付
御府下付しりりり先前之御所下付し
之と云ふ御所は細御勤之なりりり後日奉

廿七日 御返答

此箇中右並
席に御返答之御

此箇中右並

席に御返答之御

去目付決席

此箇中右並

堀下野守

此箇中右並

原 孫十郎

右

御所平是丹波守中候

廿七日

御忠隊御書

御忠表之尺御書令

大名少御所御書令向御忠表之尺御書令
書之立し不承也 御忠表之尺御書令
御所御書令向御忠表之尺御書令

廿八日

御返答

當日御所御書令向御忠表之尺御書令

軍器

四隻引渡御

陸軍總裁

去目付

白戸

石助

右

御所平是丹波守中候

一移友使
根岩肥前守

四友友使
海口伴勢守

右

静安院之福

天障院福

本壽院柳

実成院柳 苗日 以福儀守

上右集人正水之波守守

軍艦之長吉廿守中上右海

富士

朝陽

翔鶴

觀光

右之船之今廿台海軍

中総督少所所演田源之守令之上右海守以門海守

洲中守以所所守守守守

四月廿八日

田安中納言

勝義邦日記云廿八日先降総督府市旅館有守

家清邦日記云廿八日海江田本梨門合根本如守

素頼其徹書付更軍艦名等一禮買
 引渡可斗と云 軍艦之御旨付てと海江
 田氏能く其情実在明察一他之欺を察是
 其断然由所違ふ及一毎因之其を
 朝廷より考へて一七八の布力軍艦留士細
 勢胡陽觀之し四更引渡に監察之人出張
 廿九日 市征習 水戸表為儀様御旨越令
 御目付助可為奉勅回極令 野州市使は

命 此日西御存助と京

幸壽院極所用人並は
 實成院極
 御付無一色は極科と下之

群定院極
 天降院極西廣表と下
 市差中極
 畑兼右郎

右に 御付く

上様水戸表ははめ

入御詳候は極御旨は御旨

慕い御機嫌御旨に御執り若く有し御旨に御旨
 情を御執り御旨に御執り若く有し御旨に御旨
 御旨に御執り御旨に御執り若く有し御旨に御旨

中流下一押る所然り其の勢多しと急流あり
いふに下流に舟を置きて中流に渡りし事

昨日付物し役所用極り人撰し以て教令もあしり名教り
本初回極り得る事死命の中流に極り
は渡りし事

宇都郡那須

那須郡を此集し兵士為浩極り然れども相承古即

方近下は是れ其の事なり

勝義邦日記云古は西郷吉之助長藩有人海編
丸と云船より上京出所無何一者なり今朝出帆

明治元年

閏四月

朔日 壬辰

金別院大伏市札献上

市使番

田中廣太郎

おは

作付方河津伊豆守中渡

毎月
大伏市札

金別院

新治寺の寺屋組

右是是之方内朋友也其是是是治伯者方以伊豆守
去后之

二日 田安中納言殿 大久保一翁 猪安房守 自總督府
有被命旨

同日 田安中納言

江府鎮撫部頭 所締之儀 所委任の旨
精神

大総督官

伊沙所事

辰 宣 四月 二日

大総督府
久保 一 謀

一 大久保一翁 猪安房守 同 任

田安中納言

昨今之時 勢在格別 告高片方之事件 深
感思念 以程之 見込之 故之 其意 保中 出第 端
下 抽 誠 忠 旨
大総督官
伊沙所事

辰
望四月方

大総督府
系謀

勝
安房

同文云

大久保 一篇

同文云

之多し事件思ふに懐深感
中か 廠方あり極く拙忠誠云

右支条云

任出の取向は市布告ありし

勝義邦日記云壬辰四月二日本日四安殿大久保一篇

三名大総督より登

城に後有命あり病卒

を以て此中より一篇名代に書付出る

勝
安房

昨今之時勢を格別苦慮尽力し事件深

感思念の程は是に及ばず後者其意懐中出第

端す拙誠忠云

大総督官 市河清氏奉

辰
望四月方

大総督府
系謀

勝
安房

江府徳松等瑞百緯之由委任之者精

勤

大総督官 御沙汰之事

月日

同断 同

旨 勝義邦古経冊拜領 水戸表國境関門

以印鑑出入令

後義邦日記云水戸表より古経冊一葉拜領

物取の事より勝義邦のより物をおかやますと云

てある

多しよひしし沖よすのりし冊を御取

ひぬるししそおひや⁵あり

此夜水戸表至境の関門を御出入有下照り以

て取らざるしは竹葉の用ししは徳地を裁りし

を以て照り目付の事と云石川合と印鑑更取り候し

後

右ノ紙令ニテ送ル事

四日 勝義邦上書大総督

勝義邦見記云四日以田安殿御表 大総督

呈上

悚懼戰栗昧死而言上仕ハ臣義邦之微名不圖大

総督官達 上聽江府鎮撫ノ儀申委仕致

作出且昨今時勢ニ付苦慮尽力仕ハ所申感賞

於此ニ管見不憚忘諱可奉申上旨深厚ノ蒙

寵命不堪恐惶仕合ニ此元來臣義邦無才

無能唯一志ノ忠以不欺平生之素志ト仕ハ

能ト今般 市沙波ノ紙才ニ付テ織成

得ハ事一即ニ定也無以死守心付ル事

今右ニ奉シ恰モ夢中又差境ニ付テ快

下ニ奉報答所を不承決死ニ付仕ハ 仰仕ハ

職ノ之如キ臣義邦ノ不肖敢テ其ト付事

事思テ之如キ臣義邦ノ不肖敢テ其ト付事 恩榮ハ付上事

欺 朝廷下民所_レ背_レの節何_レも拜_レ何_レも
申_レ忍_レ入_レの抑_レ昨_レ々 天_レ意_レ東_レ海_レ源_レ城_レ地_レ献
納_レ日_レ到_レ之_レ是_レ安_レ然_レ法_レ靜_レ任_レ中_レ之_レ臣_レ義_レ邦_レ之_レ苦
意_レ力_レ存_レ所_レ之_レ以_レ備_レ
皇_レ威_レ之_レ赫_レたる_レ客_レ方_レ君_レ 慶_レ喜_レ 至_レ恭_レ至_レ順_レ滅_レ心_レ
致_レ久_レ所_レ之_レ存_レ任_レの_レ實_レ之_レ慶_レ喜_レ 一_レ切_レる_レ也_レる_レ以_レ祖_レ宗_レ
基_レ業_レを_レ捨_レ今_レ一_レ家_レ之_レ私_レを_レ不_レ願_レ函_レ閉_レ待_レ衆_レ之_レ
と_レ申_レせ_レと_レ也

天_レ朝_レ尊_レ奉_レ 皇_レ國_レ治_レ安_レを_レ祈_レる_レ之_レ意_レ聊_レ衰_レる_レ
所_レ無_レ以_レ存_レ義_レ邦_レ之_レ於_レ之_レ誠_レ之_レ感_レし_レ鄙_レ心_レ
頓_レ訪_レ令_レ任_レ只_レ爰_レ 慶_レ喜_レ 之_レ純_レ忠_レ鬱_レ懋_レ任_レの_レ取_レ白_レ然_レ府
下_レ寧_レ請_レ天_レ兵_レ降_レ城_レ之_レ日_レ也_レ市_レ肆_レ不_レ變_レ衆_レ庶_レ
皇_レ恩_レ時_レ有_レ之_レ如_レき_レを_レ存_レ感_レ戴_レ以_レ奉_レ一_レ者_レ最_レ
聖_レ化_レ之_レ善_レき_レみ_レよ_レる_レ不_レ以_レ度_レの_レ也_レ 慶_レ喜_レ 恪_レ勤_レ恭_レ順_レ
微_レ効_レ之_レも_レ 郊_レ中_レ也_レ 臣_レ義_レ邦_レ愚_レ昧_レ往_レ日_レ 慶_レ喜_レ 將_レ盡_レ
天_レ譴_レを_レ時_レ形_レを_レ以_レて_レ匡_レ救_レつ_レ任_レ不_レ微_レ力_レを_レ以_レて_レ躬_レ死_レ

不
下遂^二在^一方^六師征討^一耐^邦内^諸擾^者之^治之^愛
加^もい^て之^末亦^必觀^銀之^端を^も用^了す^一之^列は
如^前死^罪後^債追^念を^及い^はる^一慚^懼を^宗宗^身
之^地を^く忍^入す^一何^之 大^德智^官之^一
恩^命を^存洋^交り^の極^了す^一乃^后累^之臣^今更^一之^言
を^存献^い地^位を^及い^はる^一乃^合方^及い^はる^一乃^及い^はる^一
荒^之之^言汝^も持^たせ^ぬ之^言汝^も持^たせ^ぬ之^言汝^も持^たせ^ぬ
為^衰を^陳啓^仕す^一此^上府^下靜^謐を^達す^一遠^境之^一

生^靈安^寧を^謀す^一七^玉之^一臣^義邦^の及^いは^る
力^の及^いは^る義^の及^いは^る前^件を^申上^一恭^順之^一
至^誠士^民を^一了^了自^之感^化を^一乃^及い^はる^一慶^喜
之^行實^を及^いは^る地^位之^滿當^仕り^及い^はる^一仰
新^くを^一

聖^德天^地を^一乃^及い^はる^一皇^怒を^以て^一慶^喜
て^退隱^を 作^付府^内還^任を^一乃^及い^はる^一府
下^之荒^廢必^す恪^恭之^一乃^及い^はる^一乃^及い^はる^一

安請之即り乎心負罪慶嘉 遂之乎子之口在
府内慶嘉 之乎

朝廷之威光も拘りて一と激痛し其口在得
有反令悪人慶嘉 悔悟改心仕はれ之必候事之善
人よ其成中いりて慶嘉 元悪人慶嘉 一と其口在
一町過錯取下し方を失し慶嘉 天怒

之の事禍責自艾仕有実蹟其事慶嘉 中いりて
明く之を仕たれ慶嘉 之を慶嘉

其の事方今玉家多難之時破格に其権道と以
て之を中仁術を施されりて慶嘉

皇國之帝者も其成中いりて其用を以て有用を助け
皇化の由為りも其成りも其有り也慶嘉

偏慶嘉 之を成り律慶嘉 中いりて其有り也
臣義邦 素心一奉し不欺を心世子處中いりて

来り持標も大後智府下及び元戎軍門從征二
史臣も粗存知し其事慶嘉 其至愚至慈情

意者、候子陳上、以次、乃裁、予之、
申、憐、怒、之、如、下、俾、之、篤、也、

少、洞、空、之、下、至、以、欣、快、之、事、惘、然、以、滅、恐、悔、於、死、罪、之、

敬白

戊辰年四月

結 安房

五日 西江督

勝義邦於西城有建言者

寔成所懸、事、

外、副、總裁
川 孫 近 江 守

寔、言、事、行、格、

沅、臨、以
多、賢、上、總、舟

寔成所、事、

外、主、事、
江、連、加、賀、守

同、並、

日、並、
杉、浦、武、三、郎
森、川、在、次、郎

在、野、隊、以、並、

二、九、日、為、守、辰
在、野、隊、以、並、
結、共、八、郎

都、定、院、官、極
天、際、院、極
比、用、人

戒、野、院、柳、角、人
官、主、丹、後、守

右、守、 作、行、与、河、津、行、軍、中、源、之、

勝、義、邦、日、記、云、也、 西、城、之、事、也、 大、總、督、之、連、云、

吾等安否亦頼之小臣 汝等事府之人情を考る
小建之々々子 汝採用後之々府下静謐乎して
士民大令之應大之汝為之汝之一 汝大政師
一新之汝

皇國の首府人情 天威之新き汝汝一
静を得る時之汝内言應之一 汝汝
大総督之汝汝を仰之一 汝汝事一 汝之一 汝
之を以て應事師之汝汝之一 汝汝之一 汝汝汝

控之是邪也一 汝方氣謀海江田氏汝述之

六日 仰汝督

誠順院板口用人金江
作付知の内事之通
長下内務科七長下之

誠順院板口角五
村松吾次郎

右 汝 仰付方河津伊豆事一汝之

八日 仰汝督

騎立汝等

騎立汝等汝等
同改汝等知
官重之助

右 汝 仰付方河津伊豆事一汝之

九日 醫學所唱啓令

醫學所之他心事海陸軍附病院与唱習未成也
為心好向之云々

十日 出習

用成所改元

右記

作付与河津作付書中添之

大田書格
安高子居墨江河津部方
長田徳之助

十日 御返習

大目付
日見奉行 為市

相替隊以

岩田織部正

相替隊以

目付

平岩金藏門

右記

作付与河津作付書中添之

十二日

當夏山借米渡方令

徳義邦上書田

安殿

當夏山借米之他事三月五日通四斗米六分金直
取之飯食百俵之付金八拾五之積之他心得以布衣
以上共百俵之積之付金併減之他添之
一布衣以下は没料之他事其之振合を以張紙也

一 陸皆重百儀以之令之云云一亦減一之は致
一 遠玉を以て同文を以て其儀を以て之は致
一 通るる減方は之は致
右来るとは中より亦減令儀之を以て之は致
了有之は

了之儀令之は亦能は
陸義邦日記云十三日田安殿に一書を進呈す
亡國有罪之臣義邦謹る事今之形勢情實を

陳述す事上は既云九十九日致儀は後有之
大総督所へ城は極く之より已事今日之及は致儀
置る付何れ之は 仰せ之は 江府結核等は
仰せ厚く以て配之急は此の得る人心日下其疑念亦
結ひ之を方向を不承重君片に礼節を以て之者に
恭愷を以て之は致儀之大城より之を以て之は致
繁茂一郭城は利郭門ハ乞馬非人々之業之と
亦愛實小人に在る者是之を見之は思ひ之は形

物と其女中及び家人と向て其養ひ下し子弟僕從
之如きしとて其米色を失ひ穢濁に在り者大抵三
十七八萬人より其是より下二百万と高氏
同安生と居を可失ひ相万の盜賊横行し其事
を切害し老幼路を倒れ死す者近郊に屯集
強盜を率と強ひ倅滅見ゆ之を徳にぬれし
尚好りを強ひ下民を水火に申し投じ同安
皇天覆戴之蒼生亦何事し罪口庶の亦一各

并解仕難くと存存の徳元小臣幸到りて其
罪之者速に斧鉞を加ふ或ハ赦逐も延ひ其
罪之應に處罰す 仰付に所置は是にたう成れ
況此今御すてハ徳至矣際際すて御主と其民
隙を接し居候者数千人とあり其方と御魯
と接境し其邦内協力同心確を海に解解いり
其方と身一と其急務と存存の困内人心方向
を失ひ恐懼を抱き竊に辭教し其古事く未如し林林

此極市任向のハ何事以て抄考ノ不能ハ不致識
禮教隻獲卒教百万を正得とす何れハ用
ふ事立有之我同胞懐年之端とあり申之定而
申推算と長為在りてノ原罪之ハ 謝る事
至意ハ此れハ我君と之ハ念願爰ハ亦た
此極之至慕シ心伴也當今之世操板にて終
此と成強之然歎痛哭不堪ハ此の家ハ之卿
之立ハ此際補翼は極具ハ

朝廷ハ忠諫申す力ハ此れハ極之能操其職
与事收ハ力ハ不憚忘律申すハ此ハ
大徳智府下ハ一書を有皇仕ハ此ハ
身分ハ採用と成ハ此ハ此ハ事ハ
形勢切途大尾解ハ之ハ事ハ在傍
不愚所何卒 閣下ハ此ハ力ハ
智府ハ此ハ願ハ此ハ此ハ事ハ
一人ハ此ハ事ハ此ハ此ハ事ハ

大総督府之任志所不任と云々其類是
之性質忘機をお冒し罪を以て一死を請ふは死後
之を何するにせざるべき乎一死今心程を以て毫も
不包せしむる死罪と律云

五月十日

勝 安房

田安殿下

至りて其怒れする所あれども可哀しく御所は
不致及於下し人心忌懼を抱くは評後世を雷同

其浮燥くし蒙りたる為に奪掠人教習を以て
去り奉りて更し沈着して市街を待て富高
八戸を関り貧民の生を度を生きて市街を待て富高
衰世の風秋に道に頌に慨歎するに不極

十曾 津沼督

大總督府に並

大總督府に並
内大臣 大納言

右に 作付方 平是丹 殿中 殿

別紙の書付法極極極府々々々

御座る条の趣意極厚く亦此故録以詳懐下紙
其方未之述中論は極下紙に

右之通四安中細之殿に任候の方向は不淺極々
は亦觸は

別紙

朝廷寛典之

御座る以徳川家名も立り下下一回詳懐可

御座る方先在るは為事其は然り其前後程
候事之右有之近日法交屯集暴議亦立は候
全徳川家名存疑意亦抱り右之所業も至
り候事取之始末も至人 慶長 恭順一途之素
意も亦成り自然法向し

御所置も御延候も如き下一回安堵之場也御
下之方尚後念以恭順候遠之柳末之通篤
御中論詳懐之實約十日日記之と云家名之御

未續知りて不速に由定裁り有る名所不抱疑念
各箇恭順に於ては仰

大総督 御所法事

十六日 御取替

田代守左衛門

田代守左衛門
御取替

三言以

三言以

井上元七郎

田目付

西 周助

右 作付方正園丹波守中納言

十九日 依領知事以改正受封別物了居出方

勝義邦上書

静寛院官

王政以一新三行白

官公口法候兼神社寺院等領知事一儀以改正

了居 作付方正園丹波守中納言受封書

物意に内金奉務局に括せし概に

領事了

右在四月十九日大政有之、以布告其成、以

勝義邦日記云十九日静寛院宮内府医師中心梅は

中東治出勤を以て之を以て、此の内布有之、本

日、上書を以て、款頼中より

車頼の旨を以て

私伝先達申

大総督下、車頼の傳を寄奉る、慶長伝

天朝の御命を厚く遵奉仕敷代、城地是上

表、家、車、頼、任、り、も、不、願、海、怒、入、洋、信、

所、在、に、誠、之、を、人、之、御、申、し、下、表、百、葉、之、人、御、

誓、之、難、を、進、ま、今、の、ま、え、に、事、事、に、お、ま、い、ら、

天、威、に、善、き、し、而、も、中、寄、奉、若、洋、信、に、致、し、度、此、

恩、に、感、激、り、て、人、心、自、ら、お、慕、い、人、情、天、性、出、義、

り、て、其、情、と、こ、を、美、を、以、て、一、に、在、り、ま、い、ら、

大、政、恩、威、有、り、し、し、お、ま、い、ら、し、ま、い、ら、し、ま、い、ら、

厚、く、御、憐、れ、を、下、江、戸、御、村、に、教、知、し、下、表、

中及歳重なるを預に憚り此の家事とも近事統
走益多し一也其いハ主人遠而小洋臨亦在事
之身分として安傳に江戸屋敷に於てハ何とも
人備に適に於て多漸に義と事取何林積亦割山
市所置長引に於て孫多し一也女中附て市中
者とも正徳ナリと云傳に心配仕ハ一財不穩と大
變亦生ハ一也數萬人と云一也割之方も亦所
い乍恐

天相に正風先ハ不相立審君是近隣臨に心付
心泡とも或何とも以て恐入に此方と事取ハ何
て事取ハ一也一也一也一也一也一也一也一也
事とも一也一也一也一也一也一也一也一也
東師表に口款取も一也一也一也一也一也一也
いつ計に難と事取ハ一也一也一也一也一也一也
自然亦此と事取ハ一也一也一也一也一也一也
朝廷に在威光確半としておと程人備と在綱

人情之止事一處を以て之を懐恩威嚴然たり
正人正人正人と感戴しては此所正人正人正人
成りし後備正人の様云

乙酉月十九日

膳 安席

冬之謀に中して之を正人正人正人
京師に何れを以て之を正人正人
任じし事一石程ありしに力に就て内告あり
一橋殿正人正人川崎正人正人正人

一度去 正人正人威されし事正人正人
移居して田舎殿正人正人正人正人
むら子正人正人精怠もありし林正人正人
今此所正人正人正人正人正人正人
正人正人正人正人正人正人正人
唱らぬ正人正人正人正人正人正人
正人正人正人正人正人正人正人
何れ正人正人正人正人正人正人

あるやもふくふれともめりて心骨肉の家形
ハ宿り尾州家よりする色もあらず我徳川家
ハ加厚りも及ひなむれハ臣のともかく高きん命
とより海一平之師ハあつて道もせめて一程
殿も勅あつても色ハ盡力此より頼りきと様
をよろくき中一上女

サ方 根津昌泉院ハ孔献上

正行 市孔

根津 昌泉院

右之 菅田用事御返教

サ方 信海智 一様殿御返 菅

彰義隊頭

新田義春 池田大隅守

右之 作行与平是丹波守中殿

一様上納之殿

右之 菅田用事御返教

市同人

右

静寛院字様

天璋院様

本壽院様

実成院様は儀は何は旨

仔細は旨は何は旨

廿四日 右五家は儀は嫌は何は旨

一格殿は使

於筑後馬は旨

四家殿は使
各旨は使

水野因幡は旨

右

静寛院字様

天璋院様

本壽院様

実成院様は儀は嫌は何は旨
集人は旨は旨は旨

上

廿五日 涉沼督

徳義邦再上書は旨は旨

各旨は使

竹村徳は旨

地は旨

右

作付旨は旨は旨は旨

勝義邦日記云サカサハ
総督府上達云可

負罪之 ハ 毎之冒瀆 尊威忌懼不才

才不才の如き既之不悔忘律献言之仕

今方とも蒙居り之旨泣血奉之上は是り也

作也

朝裁申上石共禁く 御執之云云

少少古有之旨之神武不殺之 王師御

之能之而慮之其旨之御之云云

御進討御事之御徳川家譜代恩願之云々
旗之旨共後

却命違奉既之先路之御下之者也

御褒賞之御事御承之軍械之云々

之旨之御事御承之御事御承之御事

之旨之御事御承之御事御承之御事

思之御事御承之御事御承之御事

之旨之御事御承之御事御承之御事

皇國之徳を以て拙忠誠道徳有るべし
事有る者君 慶嘉 恭順之實効ありて寛典
由河佐つる 作公お拓 王政の維新之際
徳川祖宗の兼歴代君として義理をわたりて
と存亡を共にし徳を以て君若くは臣と
徳川 徳川氏にありて
天下に在りては頑民より有るは徳川氏にあり
忠臣は在りて若くは臣として忠を以て上は徳川

皇朝の徳を以て可拙忠誠道徳有るべし
事有る者君 慶嘉 恭順之實効ありて寛典
由河佐つる 作公お拓 王政の維新之際
徳川 徳川氏にありて
天下に在りては頑民より有るは徳川氏にあり
忠臣は在りて若くは臣として忠を以て上は徳川
作公お拓 王政の維新之際
皇恩被りて 下は知りて 不の是なり 天
の大地を覆ふ 皇恩を以て 下天
下萬民に感戴ありて 此の徳を以て 此の徳
詳言

之四

緒 安房

廿六日 市征督

市中取滞夜取

町奉行 荒尾 徳政

関口 良介

右に 作付方平是母故古市 殿

廿七日 勝義邦送書於冬多謀

勝義邦日記云廿七日冬多謀一書出送了右云云
是と幕府に改ハ撰國に陋習之申下ニ規模

積少ニシテ漸ク四百萬石を以テ大政ニ充テ
トモ方今

王政以維新ニ際シ陋習ニ固ク其心ハ此レニ在リ
是レ法を教ト云フ十年ニシテ百家を笑フ
トモ 當時ニ爾途我徳川氏ノ領土ヲ以テ充ラ
キニシトモ其ノ如キを以テテ歎且人心ノ向背ニ政令
ニツテ今ハ下民困弊ニ至ル所ヲ不顧ス
以テ車坐すトモ其政を廢スルニシテ此聲

を除くまゝあつたれん大政の衰微をまゝりて
しつとあつたのれん

廿八日 伊豆郡当日所攝嫡伯父使者 勝義邦送

書於西郷氏

一様殿使 都筑但馬守

田原殿使 年仲殿

海江伊勢守

右

静寛院宮様 左後院様 本壽院様

実成院様 尚りく山院様 中上右衛門正承

政之上

勝義邦日記云廿八日所攝嫡伯父書を送り且

方今一心離教し基源を乞ふ

有一 今苗を極つる時よりあて下民力得る苦む事

辛飯を悉くして生を悉くして事歳し生活

何物と心得て生を保らん歟民を國の本なり下

民室千年之恩澤を毎々承りて父母妻あり
餘飯を遊む目ありと知て其他を顧る暇あり
おひ

才二既以過日以事 大総督府に建言を

才三王政の維新に際我徳川氏に領土を以て其

用途を充ちて人々を以て以て軍に忠規換

取獲せしむれば不測に 古も終に四万あり

不己に懐之旨に事あり後今今と云ふと

大政官事、法官侍令も不置すし一況に

海陸に由武備何を以て是より充ちられん其其

名正しく其私罪、あきハ其修理を以て以て

し事、歎若くは領土、中より減ハ其罪、

父母の事、あき何と以て是に忠告し人怨

何方より物か今寛典に由り是より審判

免しりる事、領國に依りて裁許あり

以て進献すきハ事あり是れよりハ心

しつとつものしつとつ其地口玉内し居泊是をえん
て有ふ黙止しつて止おんやあつて幾許に似地
み思進臥とへしつとつ時とち路し口用逢海
内し法とつみ充らまんと充ら^ふなるへきお如斯ふ
らハハと心と快くつて悦後とつて了りあつて
中四 一家不和を生じたまふ一丸滅亡を一團不和を
生すれいし玉滅亡はつて海内し人心をうて難
敷せしめを如何

第五 亦玉し人負うは不忠女を以て目を拭て
見身を憐れつて若く一叙以不忠を流らと其
可否瞬りたつて海内し人深き思ひつてなんた
此他人にへい肯て関係するもの既と幾許今も
實際に大なるものとして忠告するれ客方君恭順
して愛ふ事す不わつて愛しおるを推察して
あつて罪を思ふしつとつ黙止する能はれ不懐忘諱
冒瀆高明死罪

て難敷せしむるべきなる一しゆんまは兵
威もまことに何れに形も尚く一時より修理を正
し各節を考へて忠諫成しなす官兵を教ふあり
とらるるも是を考へて心外に思ひは私意を
結ぶ路を横りし或は官兵を殺害すは其害
不りま生せんともいふ一人為る天命歎人心し
新之難を誠ニ慨歎すまは不堪



Faint vertical text bleed-through from the reverse side of the page, likely a copy of a document or a list of names.

明治十二年九月以元老院本謄寫

校合



